

実践まとめシート（２年次）

研究グループ	中学部（農工班）	実践グループメンバー	三浦、對馬、鎌田、山崎
--------	----------	------------	-------------

実践タイトル
作業学習 農工班 『弘大祭での販売に向けた私たちの野菜栽培』
I 問題と目的 特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）の中では作業学習の特徴として「作業活動を学習活動の中心にしながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである。とりわけ、作業学習の成果を直接、児童生徒の将来の進路等に直結させることよりも、児童生徒の働く意欲を培いながら、将来の職業生活や社会自立に向けて基盤となる資質・能力を育てることができるようにしていくことが重要である。」と示されている。本校中学部の作業学習では、手工芸と農工の２つの作業を通して、働くことや社会参加の意欲や関心を高めるため、将来の社会生活の基礎となる力を培うことを重点として学習を展開している。そのため中学部３年間を通して２つの作業班を経験できるように生徒の所属班を編成している。１年生時は教師が生徒の実態を考慮して設定し、２年生時は、もう一方の作業班を経験することを目的として１年生時と異なる作業班にしている。３年生時は、２年間の経験も含め、生徒自身が選択できるようになっているが、それぞれの作業班の人数や実態等を考慮して希望とは異なる作業班になることもある。作業学習に対する生徒の関心や意欲、基礎的な力については、学年差があり、毎年作業班のメンバーが変わるため、作業の内容や進め方などについては、生徒の実態に応じて変化させていく必要がある。 農工班では、畑作業を中心に野菜や綿の栽培、紡糸作業、染色などを主に行っている。野菜の栽培については、１０月の弘大祭の販売活動に向けて取り組んでいるが、販売数を確保することが優先され、栽培活動が教師主導で行われる傾向にあり、生徒の考えを活動内容に取り入れることが難しいことが課題であった。また、野菜の栽培は、生命の連続性や有限性について学ぶことができ、且つ収穫時には大きな達成感を得ることができる大変意義のある学習活動である。一方で収穫までに時間を要するため、作業の成果を即時的に実感することが難しく、達成感を得にくい活動が多かった。紡糸作業については、作業工程ごとの難易度に差があり、生徒の実態に応じて作業内容を設定することが可能であるものの、指先の力加減や繊細な作業技術など、集中力や指先の巧緻性が求められるため、難しい作業内容を担当できる生徒は限られていた。さらに、生徒の実態に応じた作業内容についても、大まかには設定しているものの、作業効率が優先されるが故に生徒に難易度の高い作業を求めていることも課題であった。そのため、生徒自身の作業に対する意欲や目的意識の高まりが少ないことが課題の一つとして挙げられた。そこで、生徒がより主体的に取り組める作業学習の在り方について検討する必要があると考えた。 以上のことから、本実践はより生徒の関心や意欲、目的意識を高め、「自分たちで考えたことが実践される作業活動」を目標に、生徒が学校と地域を学びの場として、学びを生かすサイクルを通し、エージェンシーの発揮に向けた学習活動の在り方を検討する。 <u>本実践の目的は、生徒一人一人が明確な目的意識をもって栽培活動に取り組み、その過程でエージェンシーを発揮できる学習活動の在り方を探ることである。具体的には、学校と地域を学びの場として位置づけ、生徒の考えや意見を反映した活動、短いサイクルで成果を実感できる単元構成、生徒同士の対話や協働を促す学習環境を工夫することを目指した。</u> 先行研究として、１年次研究「私たちのコットンボトル販売」（２０２４）では、農工班における実践の中で、<u>学習活動の意味付け</u>を通して学習活動への内発的動機付けを高め、<u>生徒相互の協働機会を設定</u>することで、

共同エージェンシーの発揮につなげ、学習全体を通して達成感を実感できる学習機会を設定することの重要性が明らかにされた。特に、地域との協働的な学びや生徒同士の対話的活動は、共同エージェンシーの発揮を促す有効な手立てであることが考察された。また、生徒の意識が自己の内部から外部へと向かうことで自己の行動に責任を持ち、行動を調整しようとする姿が見られた。以上のことから、中学部農工班生徒にとってのエージェンシーは、「自己の内部にとどまっていた意識が、仲間との共通の目的に基づいた責任ある協働活動を通して外側に広がり、さらに外部の他者へと向かっていく過程」であると仮定することができる。そこで本実践では、これらの知見を踏まえつつ、生徒のエージェンシー発揮に向け、①生徒が主体的に関わることができる学習内容の充実、②生徒同士の対話的活動を通した協働学習をどのように活性化させるか、③長期的な単元をどのように設計・指導すれば学習意欲を維持できるか、について検討することとした。

Ⅱ 実践方法

(1) 対象生徒について

中学部作業学習における農工班生徒（1年生3名、2年生3名、3年生3名 計9名）

- ・対象生徒9名の実態差は大きく、自己の気持ちを簡潔に伝えたり相手の話を聞いてそれに対して自分の考えを簡単に話したりすることができる生徒がいる一方で、言葉でのやり取りに苦手意識をもっている生徒も複数名いる。集中して自分の役割に取り組もうとする生徒が多い中で、活動を渋る生徒や、教師の支援を受けてから活動する生徒もいる。技能面については、ほぼ全員が農作業の経験がないため、教師の支援を受けながら一つ一つの作業に取り組んでいる。

(2) 実践の手続き

【実践概要】

本実践は、中学部農工班の作業学習において、生徒が主体的に取り組む姿勢や学習意欲の向上を目的として行った。従来の野菜の栽培活動では、教師主導で栽培計画や作業内容が決定されることが多く、生徒の学習意欲や目的意識の高まりが少なかった。その結果、生徒にとって活動は受動的であり、学習全体の見通しや達成感を十分に得られない状況があった。

本実践では、これらの課題を踏まえ、以下の工夫を取り入れた。まず、生徒が自分で育てたい野菜を選び、育て方を調べた上で、少人数（2～3名）チームで栽培活動を行うようにした。また、最終目標として、弘大祭での販売を設定し、売上を得ることを目指すことで、学習への目的意識を高めた。さらに、少人数チームにすることで生徒同士が対話しながら作業を進める場を設け、生徒の意見が学習内容や活動方法に反映されるようにした。

加えて、外部指導者として弘前大学教育学部教授勝川健三氏による栽培に関する講義、生育記録の共有をしながら、生徒の理解と技能の向上を図った。

学習の効果を把握するため、単元学習の前後にアンケートを実施し、野菜栽培に対する目的意識や目標設定、生徒の主体的な取り組みの変化を記述式で評価した。これにより、生徒が主体的・協働的に野菜栽培活動に取り組み、自己のエージェンシーを発揮する様子を明らかにすることを目指した。

【目的達成に向けた重点項目】

1年次研究で生徒のエージェンシーを発揮させるために、学習単元の構成において重要であった要素を加え、課題として挙げられた点について、以下の方法で改善し、実施することとした。

<重要な要素>

- ・生徒の主体的な学習を促すことができるように、学習の目的を明確化し、学習への動機付けを高める。
- ・生徒が自ら進んで学習に取り組めるように、やりがいのある学習を計画する。既習の学習を生かすこと

もに、その過程において生徒自身が活動内容を自己決定・自己選択できる場面を設ける。また、地域の方との協働的な学習環境を構築する。

- 短いサイクルで成果を得られる活動を設定し、それに対して分かりやすい評価が得られるようにし、生徒が自己の活動の成果を実感し、達成感を得られるような学習環境とする。

<課題に対する改善策>

- 生徒の考えや意見を野菜栽培学習に反映させる。
- 生徒同士の対話的活動を活性化できるように、少人数、短時間での話し合いを計画的に実施する。
- 野菜作りの単元の中に、短いサイクルで成果を得られる小単元を入れる構成とする。

【単元計画】

1. 栽培する野菜の選定

- 弘大祭で野菜を売ることを知る
- 売りたい野菜を考える
- 自分が育てたい野菜を選択する
- 同じ野菜を選択した人と育て方についての調べ学習

2. 外部人材の活用

- 弘前大学教育学部にて勝川健三教授による特別講義「野菜の栽培」受講
- 野菜作り
- 勝川健三氏との生育記録の共有（情報共有アプリの活用）

3. 販売に向けた取り組み

- 保護者へ野菜栽培活動の紹介と販売物の紹介

(今後予定している学習活動)

- 弘大祭での野菜の販売に向けた準備活動
- 青森県立柏木農業高等学校との農業交流学习
- 弘大祭での販売実習
- 染色作業

【検証方法】

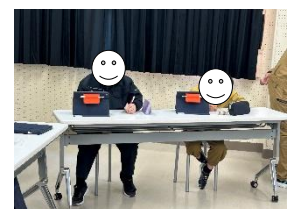
- 対象生徒に単元学習の前後に学習内容に関する記述式アンケート調査を実施。記述内容についての比較・分析を実施。
- 栽培する野菜についての対話的活動、野菜の栽培活動の中で「エージェンシー発揮につながる学習の姿が現れていたか」について、生徒のエピソード記録を基に複数の指導者で質的分析を実施。

Ⅲ 指導の実際

【学習内容と様子】

栽培する野菜の選定

1. 弘大祭で野菜を売ることを知る（5月13日）
2. 売りたい野菜を考える（5月13日）
 - 売りたい野菜とその理由について考え、話し合いを行った。



<生徒からの発言より抜粋（育てたい野菜とその理由）>

○枝豆

- おいしいから。
- おつまみ人気ランキング1位
- 収穫時期は、6月から7月。品種によっては10月まで収穫できる。
- スーパーでの値段は246円で、4つ売れるとランチ1人分。
- 食べ出したら止まらない。

○はくさい

- おいしいから。
- 10月中旬に収穫できる。
- 大きいから。
- 値段が高いから売れると思う。キャベツよりも高い。
- 値段は高いけど、売れば大きなお金になる。

○さつまいも

- いもほりをしたいから。
- おいしいから。
- 焼きいもが好きだから。
- 子どもと大人に人気だから。

○ひまわり

- 種が食べられる。
- 種がハムスターと小鳥のえさになる。
- 8月に種をまくと、9月中旬に満開になる。
- 値段は、100円から1,000円。
- 食べないから買わない。

○ねぎ

- 収穫が10月までに間に合う。

○にんじん

- 子どもに人気がある。
- 甘くておいしいから。
- お母さんが子どものために買って行く。

3. 自分が育てたい野菜を選ぶ（5月15日）

- 売りたい野菜を全体で話し合いながら決定した。
- その中から、自分が育てたい野菜を選んだ。
- 育てたい理由を考え、全体で共有した。

<生徒からの発言より抜粋（グループ分けについて）>

- 女子には大変な作業だから、枝豆の方がいい。
- 3年生が2人いるチームは、2人のうちどちらかが移動したい。
- 1年生は作業が初めてだから、自分の希望の野菜へ。
- 男子、女子は関係ない。
- 1年生1人、2年生1人のチームよりも3年生のうち1人が違う野菜に移動し、3年生1人とグループになった方がよい。
- やったことないもの挑戦してみようかな。
- やりたかったけど、違うところでがんばります！
- 農工班で作ったことないから、やってみようかな。



4. 同じ野菜を選択した人と育て方についての話し合い（5月28日、6月11日、12日）

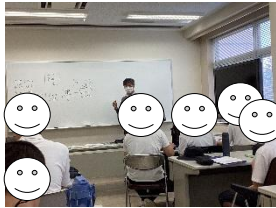
- グループिंगをし、野菜の栽培方法を調べ、分からないことや知りたいことなどを話し合った。
- 植え付けの時期や手入れの仕方など、分からない部分やさらに知りたい内容をまとめた。
- 質問事項をまとめ、全体で共有した。



外部人材の活用

5. 大学にて勝川健三教授による特別講義「野菜の栽培」受講（6月17日）

- 自分たちが育てたい野菜と、その栽培方法について教えていただいた。肥料や水やりの頻度などの質問をした。
- 大学にある畑を見学し、栽培方法について学んだ。マルチングや手入れ方法など、実際の畑の状態を見たことで、作業内容を具体的にイメージすることができた。



6. 野菜作り、勝川健三教授との生育記録の共有（6月～10月）

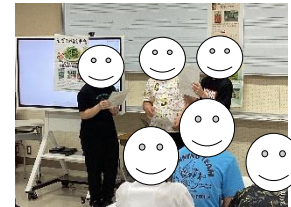
- ・自分たちで調べたこと、教えていただいたことを参考に、ニンジン、サツマイモ、エダマメ、キャベツの4つのグループで栽培活動を開始した。
- ・栽培途中で気になったことや聞きたいことを、その都度情報共有ツールを用いて勝川健三教授に連絡し、解決できるようにした。



販売に向けた取り組み

7. 宣伝会を実施し、栽培活動の紹介と販売物の紹介（7月4日）

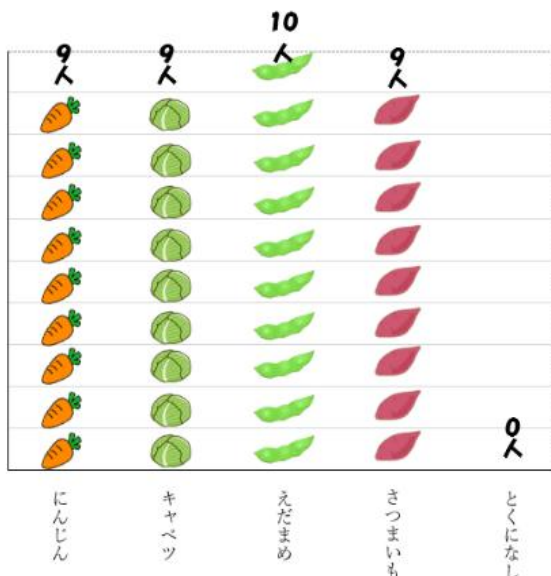
- ・保護者に対して、栽培活動の紹介と販売活動の宣伝を行った。
- ・宣伝会后、野菜の販売会についてのアンケート調査を行った。
(アンケート調査内容：買いたいと思った野菜とその理由、販売時に求めること)



8. 宣伝会で行ったアンケート調査結果の確認（7月8日）

- ・アンケート調査結果を生徒へ伝え、共有した。

しつもん1「弘大祭で買いたいと思った野菜はありますか？」



※保護者10名からの回答結果

しつもん2「どうして買いたいと思いましたか？」

1位	食べてみたいから	(9人)
1位	生徒が、がんばっているから	(9人)
2位	ていねいに、育てているから	(6人)
3位	調理(料理)してみたいからです	(5人)
4位	安そうだから	(2人)
5位	子どもたちが頑張って育てた野菜で、自宅でおいしい料理を作って食べさせてあげたいから	(1人)
6位	説明を聞いて食べてみたいと思ったから	(1人)

しつもん「販売のとき、どういう販売がいいですか？」

1位	ていねいな接客	70%(7人)
1位	活気のあるふんいき	70%(7人)
2位	料理のレシピがほしい	60%(6人)
3位	品質のいい野菜を売りたい	40%(4人)

生徒に提示したアンケート調査結果

Ⅳ 結果

1. 対象生徒への単元初回と単元終了後に学習内容に関する記述式アンケート結果について

本実践の単元初回（5月15日）と単元終了後（8月26日）に、生徒になぜその野菜を選んで育てたのかについてアンケート調査を実施した。質問項目は「あなたは、なぜそれ（野菜）を選びましたか、理由を書きましょう。」である。生徒8名（1名未実施）の回答内容は以下の通りとなった。回答結果について、野菜作りの最終目的である「お客さんへの販売」を意識した記述内容の出現数を比較し、生徒が野菜作りを行っている目的の変容を分析した。比較するにあたって、野菜を他者へ販売する意識がある言葉として「客（購入者）」「販売（売る）」「弘大祭」を意味する言葉の出現数をカウントした。

生徒	単元初回（5月15日）	出現数	単元終了後（8月26日）	出現数
A	さつまいもはむずかしそうだけどやる	0	さつまいもはおいしい野菜だから選びました。 お客さん に 買わせたい から。	2
B	枝豆が好きだから。	0	枝豆は10月に育てること。 弘大祭 で野菜を 売 っていること。	2
C	おいしいからです	0	はくさいは10月に収穫できないからキャベツにしました。	0
D	自分が選んだやつだから	0	自分が選んだやつだから	0
E	芋を掘るとき、宝さがしみたいで楽しいから	0	さつまいもが好きだから。 いろんな人 にさつまいものおいしさをしてもらうため。もっと いろんな人 にたべてもらいたいから。	2
F	高く 売 れるから	1	はやく育つ、大きくなるから。	0
G	おつまみにんきランキング1位だから	0	ひろだいさい で う るため。チームできめたから。	2
H	やったことないので、やってみたいです。	0	畑作業でにんじんを育てたことがないから。 はんばい 実習でたくさん 売 りたいから。	2
合計		1		10

お客さんへの販売を意識した言葉は単元初回と単元終了後で比較すると、出現数が1から10へと増加していた。また、お客さんへの販売を意識した言葉を記述した生徒数が1名から5名へと増加した。単元終了後の記述では、「買わせたい」、「弘大祭で売りたい」、「たくさん売りたい」など、買い手であるお客さんへの視点をより意識した記述内容が増えていることが分かる。これは、生徒の野菜を育てる目的が、より他者を意識したものへと変容していったと言えるだろう。

2. 栽培活動におけるエージェンシー発揮の具体的な姿と質的分析結果

本実践では、生徒の言動を複数の教師が直接観察し、記録にまとめ、教師間で共有した。加えて、動画・音声による記録、アンケート等への生徒の記述を基に評価することで、以前は見られなかった、あるいはごく限られていた新たな行動が確認された。これらは、生徒が自ら目的をもち、仲間と協働しながら学習を進める中で現れたものであり、性質に応じて以下の4つのカテゴリーに整理した。

（1）目的意識の高まり

栽培活動に主体的に関わる姿が多く見られるようになった。

- ・育てる野菜が決まると、育て方について詳しく調べて、文章だけでなく絵を描いて分かりやすくワークシートへまとめていた。
- ・以前は畑作業中に頻繁に座り込んで休憩をとる様子があったが、野菜チーム結成後、休憩をとらずに自主的に水やりや草取りに取り組むようになった。
- ・野菜が虫に食われたり病気になったりするとお客さんに販売できないことについて話すようになり、

勝川健三教授の特別講義の際に虫や病気を防ぐための方法（防虫ネットの有無）についての質問を考え、質問していた。

- ・天気予報を日々確認するようになり、作業学習の日に畑作業ができるかどうかについて事前に担当教師のところへ相談に来るようになった。
- ・夏休みに入る際に、休み中の野菜の様子が気になるため、休み中も登校して野菜の世話がしたいという自分を自分から教師に提案していた。

これらの変化は、担当する野菜への愛着が沸くのと同時に、活動が「自分の役割」として意識化され、学習に対する目的意識が高まったことを示している。

（２）協働性の高まり

少人数チームでの活動を通して、作業分担の他に、共通の目標に向かって互いを尊重し合う協力的な関係が見られた。

- ・ある３年生の生徒の中には、野菜の栽培担当者を決める際に、育てたいと考えていた野菜チームから、人数が不足していて３年生のいないチームへ希望を変更した。変更した理由として、「農工班を過去に経験している３年生がいたほうが野菜作りがスムーズにできると思うから」と話していた。
- ・外部専門家からの助言を真剣に受け止め、野菜の生育の様子を見て「（勝川）先生の言ったとおりだ」と喜びを表現するなど、他者の指導を積極的に学びに生かそうとする姿があった。
- ・これまで自分だけで塩タブレットを食べていた生徒が、チームの仲間にも配るなど、仲間を思いやる行動が見られた。
- ・当初は「これ、俺がやる」と自己中心的だったが、時間の経過とともに「俺がこれをやるから、〇〇さんはこれをやって」と仲間を意識した役割分担を行うようになった。
- ・教師ではなく仲間に質問して判断を求める場面が増え、学習の中で仲間を信頼する姿が見られた。

このように、協働的な関わりは「共に活動する仲間」として互いを認識する基盤となっていた。

（３）相手に理解してもらうための言動の工夫

生徒が自分の考えを相手に十分に伝えるために、同じチームの生徒に対して働き掛け方を工夫する場面が増えた。

- ・同じ野菜チームの一員として、相手に伝わりやすい言葉を選びながら粘り強く説明するようになった。伝わらない際には説明内容を変えたりジェスチャーを加えたりしながら相手に伝わるまで説明していた。
- ・参観日に仲間が困っていることに気付き、言葉だけではなく指差しで知らせるなど、相手に伝わりやすい方法で伝えていた。

これらの言動は、前述した（２）協働性の高まりに付随して生じ、自分の考えを相手に伝えるといった外的（相手）に働きかける姿を引き起こしたことから、エージェンシーの発揮を示す具体例である。

（４）他チームの活動への関心の高まり

学習が進むにつれて、自分や自分のチームだけでなく、他チームの活動や野菜の成長にも関心を寄せる姿が現れた。

- ・キャベツの成長を観察し「育ってる」とつぶやいたり、枝豆の状態を教師に的確に伝えたりするなど、他の作物や仲間の活動への意識が高まっていた。

このように、自分のチームの枠を超えて他者に視線を向ける姿は、エージェンシーの発揮に向けた土台作

りの過程を示している。

以上の結果から、生徒たちが目的意識をもち、仲間と協働しながら相手に働きかけ、さらに他者へと関心を広げていくプロセスが確認された。これらは、単なる作業スキルの獲得にとどまらず、「自分の行動が学習や人間関係に影響を及ぼす」というエージェンシーの発揮に向けた基盤の形成として捉えることができる。

実践を通して得られた生徒の変化は、一時的な行動の変容にとどまらず、作業学習以外の場面でも野菜の生育状況について生徒間で共有したり、後期の自己目標を野菜の栽培に関する内容にしたりする生徒が複数見られ、学びの広がりや自立に向けた基盤の形成を示唆していた。

V 考察と課題

【考察】

本実践では、中学部農工班の作業学習において、生徒が目的意識をもって活動に取り組み、その過程でエージェンシーを発揮できる学習活動の在り方を探ることを目的とし、①自己決定・自己選択の場を設けること、②地域の人々との協働的な学習を取り入れること、③単元の中に小単元を設定し短いサイクルで成果を実感できる仕組みを作ること、④少人数・短時間での対話的活動を導入することを工夫した。その結果、生徒のエージェンシーの発揮として、以下の4つの姿が確認された。

1. 目的意識の高まり

2. 協働性の高まり

3. 相手に理解してもらうための言動の工夫

4. 他チームの活動への関心の高まり

まず「目的意識の高まり」については、単元の冒頭で教師が「野菜の売上で豪華なランチを食べる」明確な目的を提示したことにより、生徒の学習活動への動機付けが喚起された点が大きい。その目的意識を基盤として、生徒は調べ学習や対話的活動、外部人材との協働活動に積極的に取り組むことができた。また、育てる野菜を生徒自身が決定し、2～3名の少人数チームで責任をもって栽培に取り組むという枠組みが設定されたことで、活動が「自分ごと」となり、主体的な姿勢が促された。これにより当初は「豪華なランチを食べたい」という動機が主であったが、次第に「野菜を育てたい」、「野菜をお客さんに売りたい」という活動そのものへの動機へと移行していったと考えられる。外部専門家による支援も、栽培活動に自信をもって取り組むことへの後押しとなり、この動機付けをさらに強める要因となった。

次に「協働性の高まり」については、チームでの対話や役割分担を通して、それぞれの生徒が相手を思いやり、やって関わり合う姿が見られた。単なる役割分担にとどまらず、「どうすれば相手に伝わるか」、「どうすれば相手が困らずに活動できるか」といった視点で行動を工夫していた点は、状況に変化を起こすために自らの行動を調整する、まさにエージェンシーの発揮に向けた変容であったと言える。さらに、目的の達成に向けて自己の力だけで問題解決を図るのではなく、同じチームの人と協力することの良さへの気づきが生まれたことにより、相互理解に向けて「相手に理解してもらうための言動の工夫」が見られるようになったと考えられる。この協働的な関わりを通じて、より広い範囲の他者へと関心を広げていく生徒の姿も確認された。本実践は、その発達の段階を示す具体的事例となったと考えられる。

【本実践から得られる教育的示唆】

1. 目的の明確化と自己決定の保障の重要性

明確な動機付けから始まり、生徒自身で自己選択・自己決定しながら学習を進め、徐々に学習目的そのものに関する動機付けへ移行するプロセスを踏むことで、生徒の学びはより主体的なものになる。したがって、作業学習においては「到達可能で具体的な目標」を示すことと同時に、生徒自身が内容や方法を選択で

きる仕組みを設けることが重要である。

2. 具体的な成果を実感できる小単位による短い学習サイクル

野菜栽培のように長期的な活動では、達成感を得るまでに時間がかかる。その長期的な活動の中に小単位を設定し、短いサイクルで達成感を積み重ねることは、学習意欲を持続させ、エージェンシーの発揮を促す上で有効である。

3. 協働的・対話的活動の意義

少人数での対話的活動や役割分担は、単なる共同作業を超えて、他者への関心を育むことが示唆された。これは「自分の行動で状況を変えられる」というエージェンシーの根幹に結びつく要素であり、今後の作業学習において積極的に取り入れるべきである。

以上より、作業学習におけるエージェンシーの発揮は、目的の明確化・自己決定の場の保障・小単位による成果の実感・協働的な学びの場の設定といった複数の要素が組み合わさることで可能となることが示された。今後は、この生徒の主体的、協働的な姿の現れを生徒が自己認識できる効果的なフィードバックを行っていくことで、生徒自身が自己の成長を的確に捉え、自己の行動が相手や周りにどのような影響を与えたのかを理解する助けとすることができると考える。また、こうした要素を体系的に取り入れながら、学習集団を構成する個々の能力や課題に対して最適化された学びを連続的に設定していくことにより、生徒のエージェンシーをより持続的かつ発展的に高めていくことが教師には求められる。

VI 参考・引用文献

- ・ 文部科学省（平成 30）．特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部），33-34.
- ・ 菊地一文（2024）．共生社会を形成する一人一人のウェルビーイングの向上を目指すうえで求められること 特別支援教育研究, 東洋館出版, 4 月号, 26-29.